

## 私と聖書

鍋谷堯爾

### 前書き

2年半の監修と執筆のち、聖書神学事典が完成、7月2日に出版記念会が無事終わり、さて3月に依頼のあった「福音主義神学41号」への執筆依頼文を改めて開いて驚きました。期日は8月31日、執筆分量は1万5千字~1万8千字とあります。これは大変な分量ですぐには書けないなと思いました。しかも、内容は、「40年間の歩みを振り返り、その評価、今後への課題、後進の者たちに対する助言、苦言など、叱咤激励をお願いする」そして、「鍋谷には聖書神学の分野を中心に」ということでした。

私には、福音主義神学会の40年を分析評価するとか、まして、若い先生への助言などのおこがましい文章を1万5千字~8千字も書く自信はまったくありません。ただ、自分が40才で創立にかかわり、今、80才になったという40年間の厳肅さというものは身に沁みています。創立の頃は、イザヤ書の研究の一応の区切りもつき、もっと自信があったように思えます。今は、昨年からは「創世記を味わう」に取り組んでいるせいでしょうか、どこまで行っても、「トーフー・ワ・ボーフー」で、なかなか「光」まで至りません。向こうに見えるのは「やみ」、わずかに「神の霊」がおおっているのが支えのような今日この頃です。それで、「私と聖書」という一文をしたためて、読者の皆さんにあとは、おゆだねすることにしました。

### 生い立ち

もう11年も前のことです。「少年H」という小説が講談社から出版され、200万部が売れるというベスト・セラーになりました。この小説を書いた妹尾

河童君は、神戸二中（現在の兵庫高校）で私と机を並べた同級生です。大平洋戦争の最中の1942年に中学に入り、勉強よりも、軍事教練、校舎を改造した三菱の軍需工場でのモーターづくり、校庭のさつまいも畑への水やりで毎日は過ぎてゆきました。3年生になると、毎日、防空演習が始まりました。3月17日と6月5日の空襲で神戸の町は灰塵に帰りました。3月17日午前1時に始まった空襲は神戸の町の3分の2を焼き尽くしました。「Hは、自分が住んでいた街が、こんな風に見渡せるようになると、とても狭くてちっぽけだったことに気づいて戸惑った。昨日までは、もっともっと広い街だと思っ込んでいたからだ」（少年H）。

妹尾カッパ君の両親はクリスチャンでした。特に、母親は熱心なクリスチャンでした。当時、クリスチャンは「非国民」よばわりをされて迫害されました。牧師は、特高警察に呼び出され、「天皇陛下とキリストとどちらが偉いか」と質問され、「キリストです」と答えると、留置所に入れられ、拷問を受け、中には、死ぬ人もありました。

しかし、一般の市民は、ひたすら天皇陛下を「現人神」であるとして拝まされ、学校の校長は、空襲になると、なによりもまず、ご真影と教育勅語を持って、安全な場所に移すことが義務でした。すべての宗教は、国家神道の下に統合され、それに反対する教派は解散するか、迫害を受けました。

### 聖書との出会い

私が聖書と初めて出会ったのは、今から59年前、三田にある結核サナトリウムに入院中のことです。その当時、日本では、結核の死亡率が一位でした。療養所に入れば、5人にひとり、裏門から出ると言われた時代でした。私の病気は、右肺の下葉にある卵大の病巣で、気胸とか気腹とかでは治りにくい位置にあり、まだ、ストレプトマイシンとかヒドラジッドなどの新薬はなく、「大気、安静、栄養療法」が唯一の治療法でした。当時は、まだ食料は十分でなかったもので、松林の中に建てられた粗末な病室で、昼も夜も、夏も冬も、開け放たれた開放病棟でただじっと寝ているだけの毎日でした。6人部屋でしたが、上を向いて臥せているだけで、隣のベッドの人とずっと話をしているわけにはゆかず、天井の節目を数えながら、いろいろものごとを考えていました。

最初は、学校のことを気がかかっていました。開けっ放しの病室に「絶対安静」を命じられて寝ているだけの毎日でしたが、そのうちに、悪くなった患者が個室に移り、数週間後に咯血とか、呼吸困難で亡くなっていくのを見ると、自分も明日はそのようになるのではないかという不安が襲ってくるようになりました。

ある時、一人の男性が、「バイブル・クラスにはいませんせんか？」と誘いに来ました。その当時、600人の患者のうちで、100人の人がバイブル・クラスで会員でした。（カトリックの会員が別に50人）。入会するとすぐ、彼は一冊の聖書をもってきました。それは、アメリカで印刷された贈呈用の新約聖書でした。私は貪るように聖書を読み始めました。全部を読みとおすのに何日もかからなかつたと思います。普通の本と違って、文章はそれほど難しくありませんでしたが、何か納得したい感じがありました。もう一度読んで見ました。また、もう一度、読んでみました。マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝と読み進めるうちにひとつの「ことば」にひっかかりました。

イエス言いたまふ「我はよみがえりなり、いのちなり、我を信ずる者は、死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこしえに死なざるべし。汝、これを信ずるか」（ヨハネ11章25-26）。

当時は、まだ「口語訳聖書」はなく、大正訳と呼ばれた文語訳聖書でした。このことばを信じて、58年前、1952年のイースターに洗礼を受けました。

### いやしのことば

洗礼を受けて翌年、当時始まったばかりの肺葉摘出手術を受けた私は、完全に病巣を摘出することができました。また、ストレプトマイシンや、パスヤ、ヒドラジッドなどの新薬の出現により、結核は不治の病ではなくなりました。1955年、完全にいやされた私は、大学に復学しましたが、とりあえず聖書の勉強をしようと神戸ルーテル聖書学院に入学しました。

そのとき与えられた聖書のことばは、イザヤ書53章5節でした。

新しく独立神学校を創設しました。丁度、アメリカで、プリンストン大学から、メイチェン、ヴァンテイルなどによって、ウェストミンスター神学校が創設されたのと同じです。ホアス校長も、さかんにオラフ・モーやハレスビーの話をされました。

ハレスビーは 1879 年、オスロー近辺の農家に生まれました。両親はハウゲ運動に属する熱心なクリスチャンで、ハレスビーも 23 才の時に、悔い改めと救いの体験をしました。ドイツのエルランゲン大学に学んだ後、創立されたばかりの独立神学校で教義学の教授に就任、72 才の定年まで勤めました。I V F の創立者、また、第二次世界大戦中ドイツ占領下のレジスタンスの指導者、説教者、著述家としても活動しました。彼の著作のうち、「祈りの世界」「みことばの糧」「みつばさのもとに」は私がノルウェー語から直接、翻訳出版しました。1930 年に書かれた「みことばの糧」を読み、80 年前のノルウェーを、今の日本に読み替えると、あまりにもピッタリと当てはまるのに驚きます。

「現在の世界の状況を見渡すと、何かしら無力感が迫ってきます。つぎからつぎへと犯罪が報道され、ある裁判では無罪となり、他の場合は有罪となつて刑務所に送られます。人々は、公に悪事を働くこともあれば、ひそかに悪事を働くこともあります。社会全体が公認しているような不敬虔な行爲があります。また、大部分の市民は、黙々と正直で、勤勉に、有能さをもって働いています。全く神には無関心です。

もちろん、教会や他のキリスト教の集会にも人々は集まります。しかし、来ない人たちの数はそれに何十倍もするでしょう。私たちは、こんな世の中で、神のことがばを語り聞かせることは可能だろうかと失望気味になることがあります。

しかし、ぶどう園のたとえを通して、イエスは、どのような人にも、神に語りかけられた経験があることを示しています。その内的な経験が、外面的な生活にあらわれています。

神は、ノルウェーのすべての市民に、目に見えないところで、ひとりひとりに福音を語りかけられています。そこにもれていない人は、ひとりもありません。

イエスは、そむきの罪のために刺し通され  
私のとがのために砕かれた。

イエスへの懲らしめが私に平安をもたらし、  
イエスの打ち傷によって、私はいやされた。

聖書では、イエスは「彼」であり、私は「私たち」です。私は洗礼を受けて、十字架の罪の赦しの福音にあらずから、3 年後、完全ないやしを経験しました。それは私には、目には見えないけれども、今日も生きておられるイエス・キリストの恵みのわざによるのであり、それが、イザヤ 53 章 5 節に一言で表現されているように思えたのです。それ以来、イザヤ書は聖書の中でも特別の意味をもつものとなり、何時の間にか生涯のライフワークになりました。そして、できれば原語のヘブル語で読んでみたいという希望をもつようになり、1959-61 年、神戸の青谷にある神戸ルーテル神学校から、週に三回、二年間、当時、神戸市灘区高羽にあった改革派神学校まで、ヘブル語を学ぶため通いました。ギリシヤ語よりも、先ずヘブル語を学んだこと、そして教わったのが榊原先生であったことが、聖書への自分の感性を決定的にしたと思います。榊原先生は私より一つ年下の 1931 年生まれ、当時、甲子園教会の牧師をしながら、神学校でヘブル語を教えておられました。教科書はワイングリンの「ヘブル語文法」で、説教作成のためには先ず原語テキストに当たるとあるということをお教えされました。

### 神学のまなび

1956 年、神戸ルーテル聖書学院を卒業するとすぐ、神戸ルーテル神学校の開校準備のため、私は大学に復学することを中断し、通訳兼主事として働くうになりました。神戸ルーテル神学校の初代校長はアンダース・ホアス、教授は J. M. T. ウィンテル、A. J. スタイワルト、K. チョース氏の 4 名に、ギリシヤ語の橋本竜三氏、伝道学に本田弘慈氏、比較宗教に橋本巽氏などでした。聖書学院と神学校は、ノルウェーの敬虔主義の流れに立ち、神学的には、オスローの独立神学校の神学です。20 世紀のはじめ、オスロー大学神学部が自由主義に偏したとき、オラフ・モー、ハレスビーなどが、聖書信仰に立って、

『子よ』と親しく神に声をかけられた時、そこに、耳を傾けて従わねばならないという気持ちが生じます。

神の声を真剣に聞いた時、人生はかえってきびしいものになります。なぜなら、今まで当り前に過ぎていた人生が、じつは天の父なる神へのかぎりない背信の生活であるということが判ってくるからです。それ、『お父さん、承知しました』と答えて、出かけて行かないか、それとも神の声に従うか決断の毎日がはじまるのです。」

また、神学校開校の1957年には、82才と77才になっていたウインテル、スタイワルト両先生は日本福音ルーテル教会の退職宣教師であり、しかも、49年前の明治42年（1908年）、熊本新屋敷のスタイワルト邸で神学校が創設されたとき、4名の教授の中の二人でした。二人の神学的立場は、ジェイコブスの「キリスト教教義学」と同じであり、それが、1908年にも、1957年にも、神学教育の基本として通用したことは興味深いことです。ウインテル博士の神学的立場は一言でいうならば、「聖書は神の靈感によって書かれた神のことば」（テモテ第二3章16）で言い尽くされていると思います。

#### ウエストミンスター神学校での学び

改革派神学校で、岡田稔校長やマキルエン先生その他の諸先生と知り合いとなり、そのつながりで、1967年～68年にかけて、フィラデルフィアのウエストミンスター神学校で学ぶことになりました。榊原先生について、エドワード・ヤング博士のもとで学んだことが、私の原典主義に磨きをかけることになりました。私が直接神学修士課程（M. Th.）に入學できたことは大変ラッキーなことでした。もし、M. Div. でしたら、改革派の神学、とくに、弁証学に時間ととられて修了することはできなかつたでしょう。ヤング博士の個人指導、エチオピア語を履修、三ヶ月でルツ記と創世記10章まで読んだのが博士を大いに感動させたようです。1968年2月17日、ヤング博士の突然の死によって、わずか5ヶ月の個人的な指導は終わりを告げました。せつかくの「イザヤ書の統一性」を「心をかたくなにするメッセージ」を出発点として「隠れたる神」をキーワードにしなから「苦難のしもべのうた」までのイザヤの神学思想を

辿って見るという構想は頓挫し、それは、セントルイスのコンコルディア神学校での博士論文、そして、いのちのことば社の聖書注解、旧約の部第三巻「イザヤ書」において一応完成することになります。また、その要約は、2010年7月、アジア神学協議会出版の「神学モノグラフ、第一号、イザヤのメッセージ、テキストそのものに聞く」に英文でまとめることができました。ATA Monograph, I: *The Message of Isaiah, A study of the text itself*, by

Gyoji Nabetani, 2010.

ウエストミンスター神学校での、もう一つの出会いは、服部嘉明先生との出会いです。1951年～1955年まで、三田のサナトリウムに入院していた私は、大阪のフリーメソジストの神学校から毎日曜午後、サナトリウムの集會室で説教される先生の力強いメッセージに耳を傾けました。服部先生は、卒業後、福島県平の教会で牧会、1956年、ロチェスターのロバート・ウエスレイアン大、さらにアズベリー神学校を経て、1962年からウエストミンスター神学校の修士課程を終了、さらに博士課程を終えようとしていたところでした。15年ぶりに会った服部先生は、サナトリウムを訪問した頃の引き締まった童顔の神学生ではなく、アメリカに10年以上生活したスマートな紳士でした。服部先生の方も、白衣を着て瘦せた結核患者の面影からあまりにもちがった私を見て同一人物であるかどうか疑われたかも知れません。実に15年ぶりに、改革派神学のメッカであるウエストミンスター神学校で、ただ一人のウエスレイアンと、ただ一人のルーサーランが出会ったのでした。そして、このことが、日本での、福音主義神学会での働き、つづく、アジア神学大学院の日本校設立のための協力などにつながって行きました。

ウエストミンスター神学校では、聖書資料との出会いに関するもう一つの思い出があります。それは、1967年の12月21日のことでした。神学校がクリスマス休暇に入ったので、私は、ニューヨークの郊外にある、リバティコーナのムムッタハウスで休暇を過ごすべく、フィラデルフィアから北へ向かいまいしたが、途中でプリンストン大学に寄り、有名な図書館を見学しました。立派な図書館を見学していると、一つのコーナーで古本を販売していました。その中に、なんと、死海文書第4洞窟の断片写本の写真集があるではありませんか。値段を見るとたった5ドルです。ウエストミンスター神学校では、BHK（ビ